

# 中芸高だより

平成28年度  
第1号



## 涙を抱えて



高知県立中芸高等学校 校長 前田仁子

暖かい田野の町では、入学式、始業式のころにはもう強い日差しに眉をしかめるころもあるのですが、今年の春はおだやかに過ぎて、花の名残りをじゅうぶんに惜しむことができませんでした。平成二十八年度は、二十六名というこの三年間で最も多くの新入生を中芸高校に迎えることができ、喜ばしい限りです。ピア・サポート・ホームの良いところを活かしながら、今年でも仲良く、みんながひとつの家(ホーム)にいるような学校づくりを目指していきたいと思えます。

さて、入学式の式辞でも申し述べましたが、本校は藩校「田野学館」の跡地に建っている学校です。田野学館で学んだ人として最も有名なのは郷土の志士中岡慎太郎ですが、慎太郎が十七歳であった安政元年(一八五四年)(ペリーが初めて浦賀に来航した翌年)、高知城下だけであつた藩校が郡で初めて設置されると、慎太郎はただちに田野学館に入学をしたそうです。そこでは後に「野根山二十三士」首領となつた清岡道之助など多くの有志と交わりを持ちました。

二十三士が奈半利河川敷で処刑されたとの報を得たときには、慎太郎は土佐の同志に向けて「天下挽回再挙(さいきよ)なきにあらず、然(しか)りながら今暫(しばらく)く時を見るべし。依(よ)りて沸騰(ふつとう)及び脱藩(だつぱん)は甚(はなは)だ無益(むえき)なり。涙を抱(かか)えて沈黙(しんもく)すべし。他に策(さく)なきし」(天下を挽回するために再び立ち上がることができないわけではない。しかし、今はしばらく時機をうかがうべきである。このことによつていたずらに興奮(こうふん)したり、脱藩(だつぱん)することは全く益(えき)のないことである。今は、涙をそれぞれの胸(むね)に抱えて、黙(もく)って耐(た)えなければならぬのだ。他に方策(ほうさく)はない。」という手紙を送り、怒りに燃える同志たちに自重(じゆう)を求めています。

田野学館で学んだあと、慎太郎は武市半平太(瑞山)を慕つて高知に、ほどなくして江戸に出て、文武両面ともに様々な分野・学問を吸収します。しかし、安政四年(一八五三年)、慎太郎が二十歳の時、北川村の庄屋であつた父・小伝次が病に倒れ、郷里である柏木に帰り、父の代行を務めることとなります。

慎太郎は農民のために大活躍をしました。山林を尊び、木を切つたあとへは必ず植林をさせており、また開墾された田畑には高知から作物の優良品種を取り寄せて耕作の指導を行っています。ゆずを、屋敷のまわりや山裾に植栽するよう推奨したのもこの頃です。

ゆずの香気で、塩が買えずとも川魚などを食することができるとうという、飢饉対策の一環だつたと言われています。その後、武市が土佐勤皇党を立ち上げ、それに加わるまで、慎太郎は庄屋としてただ農民たちのために力を尽くしました。郷内で飢饉が起きたときは、高知城下に直訴に出、一歩も退かぬ形相で官の蔵を開かせたと言われています。

やがて慎太郎は維新の表舞台で活躍し、盟友坂本龍馬とともに歴史に光芒を放ち短い生涯を終えることとなりますが、私はこの北川村時代の慎太郎にとっても心ひかれます。当時の青年は、現代に生きる若者より老成していたでしょうから、二十歳の若者が郷(町)や村の庄屋となつて働くこともあつたでしょうが、若き日の中岡慎太郎の仕事は、将来の安逸な生活を築くためではなく、地域に生きる民衆の命を守るために、その時必要なことを、全くの私心なく行つたと言えらるからです。

この頃、土佐の地は大地震に二度もみまわれ(安政の大地震、作物の不作が続いて疫病が流行し、飢饉に苦しむ人々もたくさん出ました。最も早くその犠牲となつたのは、病人や老人、子どもといった弱い人であつたに違いありません。目の前のふるさとの人々を見て、そこに何かしないではいられない、若者ならではの直情が胸をうちまします。慎太郎はまた、「行動の人」とも言われており、幕末の志士の中で各藩を足しげく移動した距離がトップクラスであるそうですが、ここにもまた、自分の使命を自覚したときの無私(むし)の行動力が感じられます。

複雑な現代社会で、慎太郎のように、損得勘定抜きで生きていくことは難しいと思えます。善意で行つているのに、背後から中傷されたり、邪魔をされたりすることがあります。「他の人のために」などという動機は全部表面向きで、自分が口にしていても、その実態はまるで不明という人も多いのではないのでしょうか。しかし、田野学館跡で学ぶ者として、皆さん一人ひとりをお願いしたいのです。しんどくても、他人の悲しみや苦しみを見て見ないふりをしないで下さいというこを。

自分が人を傷つけないと決心することは、完全にできるかどうかは別として、比較的容易です。皆さんはもう一歩前に進んで、一見、自分が責任を負うことに思われなくても、そこに困っている人がいれば、自分にできることをしてあげましょう。その対象は同級生とは限りません。他の学年かもしれないし、身近な家族かもしれない。人は誰でも「涙を抱えて」生きています。かの時の慎太郎のように、ただ黙(もく)って耐(た)えるだけの時も訪れるでしょう。けれど、人の弱さや自分の弱さを知りながらも、やはり目の前の人に手を差し出さずにおれない人には、自己中心的な人には決してたどり着けないところに行ける力があるような気がします。

慎太郎が植樹を勧めた郷のゆずの木は、今年も香り高い花を咲かせ、中芸の地に豊かな恵みをもたらしてくれよう。今年度も、保護者や地域の皆様にはともに生徒皆さんの成長を支えていきますよう、ご理解とご協力をお願い存じあげます。

## 平成二十八年度入学式

四月七日(木)、昼間部二十六名、夜間部六名の新入生を迎え、入学式が行われました。

式では、入学生を代表して仁井田さんが「勉強はもちろん、部活動や学校行事などに積極的に取り組む、自分自身の進路を決めるために、一杯努力することを誓います。」と決意を宣誓し、心機一転の思いを胸に、新生活をスタートさせました。



## 対面式

入学式翌日の八日、二・三年生と新入生との対面式が行われ、生徒会長の益岡くんの歓迎の言葉に、一年生を代表して山内さんがお礼と決意の言葉で応えました。

続く部活動紹介では、各部がそれぞれ作品やプレーを披露し、入部を呼びかけました。今年は一学年が積極的に入部し、活気ある活動が行なわれています。また、中芸よさこいの演舞も行われ、これから繋いでいく新たな伝統を間近にしました。

後日、山田養護

学校田野分校の皆さんとの対面式も行われ、校舎を共有する者同士、行事はもちろん日々の触れあいや小さな心配り等も一層大切にしていきます。



## 新入生宿泊研修を行いました

本年度、中断していましたが新入生宿泊研修を四月十一日(月)、十二日(火)の二日間、津野町の農村交流施設「森の巣箱」で久しぶりに行いました。

一日目は、仲間づくり「心の冒険教育」、「学校オリエンテーション」、「夕食の焼肉」。二日目は「しし唐のバック詰め」、「イタドリ皮むき」などを行つて地元の方と交流しました。男子は、全員体育館で男性教員と一緒に泊りました。この二日間で行っている中学校から来た生徒たちが次第にうちとけあつていく姿や、生徒たちのそれぞれの個性が行動や表現に見られ、また教員も生徒たちとたくさんのお話ができ、有意義な研修となりました。

日頃の日常生活から二日間離れ、集団で行動したことは、生徒たちにとって、友達と過ごせることで楽しい反面、人付き合いの苦手な生徒にとっては大変なエネルギーを使った研修であつたと思えます。しかし、これをきっかけとして、高校生活にスムーズに入れたのではと考えています。一年次生は宿泊研修のあと、六日間連続で欠席はありませんでした。この宿泊研修は、高校生活への導入の一つとして今後も続けていきたいと考えています。



## 合同避難訓練

四月二十二日(金)、昨年に引き続き、田野小学校との合同避難訓練を実施しました。防災頭巾やヘルメットをかぶって避難してくる小学生がスムーズに整理できるよう、高校生は誘導を手伝いました。

折りしも熊本の大震災から間もない時期であり、前夜には高知でも地震があつたりと、災害への備えの必要性を再確認する訓練となりました。

